

## 4. アニメ映画に吹く風 —宮崎駿の仕事—

キーワード 労働 詩 力 ファンタジー 創造

1秒間に24コマの静止画が必要なアニメーションの制作には、多くの人々の途轍もない労力と際限のない時間が不可欠である。それゆえ、そこに携わる一人ひとりの粘り強い熱意がなければ、制作の行程は成り立たない。さらに、そうした一つひとつの仕事への敬意がなければ、作品が胎動するということはありえない。この熱意と敬意の両輪が回るとき、労働現場における〈詩〉の誕生の契機が見出される。この詩性こそが、映画を観る者的心をもっとも震撼させるのである。宮崎駿（1941～）はそのことを熟知している映画作家であり、監督のみならず、シナリオ・絵コンテ・台詞のすべてを一人でこなし、制作の全工程にチェックを入れている。映画工房スタジオジブリでは、この宮崎の超人的な仕事を鈴木敏夫プロデューサーと盟友・高畠勲監督が内側から支えている。

多くのスタッフの長時間労働と多大な制作費を要するアニメーションでは、否応なく観客動員数、すなわち興行成績が問われることになる。宮崎駿の作品は11本の大作すべてが大ヒットとなっており、とりわけ、2001年の『千と千尋の神隠し』は、興行収入303億円を獲得し、日本映画界で歴代1位となるのと同時に、2002年ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞している。このように、商品価値を手放さずに、あくまでアニメーションを芸術として、すなわち、テレビではなく映画として提示するという離れ業を、宮崎の作品は成し遂げてきた。このことは、宮崎駿の名を、かつての小津安二郎、溝口健二、黒澤明といった映画作家と同様に、国内外に轟かせることになった。

しかしながらこの事態は、作品を通して一貫して抵抗してきた、そしてそれを超えるものの存在を提示してきた、権威・名誉・金錢といった「力」を宮崎に与えることになった。この「力」をかなぐり捨てて端的に作家するためにこそ、宮崎は超人的に働くのであり、「働くということ」は宮崎の作品すべての通奏低音となっている。そしてその労働の源泉には、徹底的なファンタジーを描けば、それは現実を超えるリアリティを有し、観る者一人ひとりの想像力を開花させるという宮崎の並々ならぬ一念がある。『風立ちぬ』を別とすれば、宮崎の作品はすべてファンタジーであり、子どもに向けて制作されている。だが宮崎の作品は——文学におけるサン=テグジュ

ペリ『星の王子さま』や宮澤賢治『銀河鉄道の夜』のように——、大人の想像力をも刺激する射程を有している。

さらに、「働くということ」を通して「自分自身を生きること」を獲得してゆく宮崎アニメの主人公の多くは女性である。圧倒的な男性社会のなかで低い立場に置かれた女性のすがすがしい生き様は、宮崎の女性に対する聖女崇拜的な眼差しであるとの批判もあるが、男女が不平等な社会において、不平等を被る側に作家が立つことで、作品の均衡が保たれている。というのも、主人公が男性である場合はかならず、『紅の豚』における「豚」であったり、『風立ちぬ』における軍需産業の技術者であったり、端的に美しいとはいえない存在だからである。こうした負のレッテルを背負った主人公たちが「歴史的・社会的自己」を手放さずに生きる姿が、強烈な美の閃光において映し出されている。とりわけ、コピーライターの糸井重里（『となりのトトロ』）、評論家の立花隆（『耳をすませば』）、映画監督の庵野秀明（『風立ちぬ』）のように、確固とした自らの現場をもつ異分野の職業人たちを声優に起用するという独自性は、「自分自身を生きること」を鮮烈に映し出す役割を果たしている。

宮崎の作品に特徴的な要素は風である。風が目に見えるようになるのは、私たちの慣れ親しんだものに風が触れ、それらと共に鳴することによってである。風は私たちの意志ではどうにもならない苛酷な災禍をも呼び起こす。天災であれ人災であれ、その絶体絶命の事態に主人公がどう向き合い、どう生きるのかを映画は問うている。「風が吹くこと」によって私たちの「生きること」が触発されるのである。すなわち、正の局面においても負の局面においても、「風」を受け入れて生きる人間の美しさがそこにある。自らに降りかかる運命を受け入れて生きる人々の存在の強さを、『風の谷のナウシカ』から『風立ちぬ』に至るまで、宮崎のアニメ映画は描き続けてきた。

だがファンタジーの中で「風になる」ことはできても、現実世界で風になろうとすれば、「飛行機」という人為を介さねばならない。飛行機によって重力に抗して空を舞うことは、神に倣おうとすることであり、それはしばしば神威をもって自らを偽装する政治権力と結びつく危うさをもつ。その矛盾は、戦闘機マニアにして反戦主義者という宮崎自身の矛盾とも重なり合う。こうした矛盾を矛盾として「見つめること」が宮崎アニメの核にあり、その姿勢が芸術創造から私たち一人ひとりの生の創造へと転換をもたらすのである。

（今村 純子）